『あなたはもう見ています』　ヨハネ9:35-41

9:35 イエスは、その人が外へ追い出されたことを聞かれた。そして彼に会って言われた、「あなたは人の子を信じるか」。
9:36 彼は答えて言った、「主よ、それはどなたですか。そのかたを信じたいのですが」。
9:37 イエスは彼に言われた、「あなたは、もうその人に会っている。今あなたと話しているのが、その人である」。
9:38 すると彼は、「主よ、信じます」と言って、イエスを拝した。
9:39 そこでイエスは言われた、「わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」。
9:40 そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、それを聞いてイエスに言った、「それでは、わたしたちも盲人なのでしょうか」。
9:41 イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。

●序論
アメイジング・グレイスという映画に描かれる、ウィリアム・ウィルバーフォースという人の半生があります。それは、黒人奴隷の売買を公然と生業ととしていた当時のイギリスで、奴隷貿易廃止の実現にその人生の時間をささげた人の物語です。
彼のはじまりはイエス・キリストの救いを経験し、それまで、その目に見えていなかった奴隷制度での黒人たちへの非人道的な虐待に目が開かれ、それから20年以上にわたる奴隷貿易廃止に尽力するようになったというのです。
その間20年余り。ひどい言葉でののしられ、友を失い、病に冒され、人々から背を向けられて失意に陥ることで長く過ごすこともありました。
そんな中で彼を支えたのは、伴侶の励ましと、神様ご自身の心に迫る強い御思いでした。
「神はすべての人を大切に思い、心から愛しておられる」と。

聖書に戻って、これまで読んだ9章は、生まれつき盲人の人が物乞いをしていたところから始まっています。その人をさして弟子たちが、
「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。と訪ねています。
非常に、失礼な言葉ですが、この当時の常識では、そういう理解が当たり前でした。
だからこそ余計に、そこで耳にしたイエス様の言葉は、衝撃的だったのです。
9:3 イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。
そうしてイエスさまは、その言葉を証明するかのように、この盲人を癒されたのです。
ただそれを聞いても、依然として閉ざされた心の目を持ったユダヤ人たち、パリサイ人たちは、彼の癒しを認めることも、喜ぶこともせず、むしろ疑いの目を向け、非難をし、彼の事実をどうにか捻じ曲げようとしていました。
そんな中で彼は、自分の身に起きた、恵みの事実を手放さなかった。これが大切です。

9:25 すると彼は言った、「あのかたが罪人であるかどうか、わたしは知りません。ただ一つのことだけ知っています。わたしは盲人であったが、今は見えるということです」。

私たちの周囲は、その時代の常識や評価や知識という基準を持ってきて、様々な方法で、私たちを、神の恵みの事実、救いの喜びから引き離そうとします。

救いを通して、本当の神体験を通して目が開かれることです。

すべての人は、例外なく神さまに愛されている。愛されているがゆえに尊い存在なのだと。

そうしてわたしたちは本当の意味で、キリストを見る者とされていくのです。

●本論

Ⅰ．イエスさまが彼を見いだされた

この物語の始まりは、イエスさまのまなざしから始まったとお話しました。

9:1 イエスが道をとおっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。

そして今日、会堂から追い出された彼を探し見いだしたのはイエスさまでした。

彼が会堂を追い出された理由は、彼が自分に起こったことをまっすぐに伝え、自分を癒してくれた方が「神から来られた方にちがいない」とそこで表したからです。

9:33 もしあのかたが神からきた人でなかったら、何一つできなかったはずです」。

9:34 これを聞いて彼らは言った、「おまえは全く罪の中に生れていながら、わたしたちを教えようとするのか」。そして彼を外へ追い出した。

ああよかったね。この元盲人の人は、あんなわからずやの人たちに追い出されて。さぞかし清々しているに違いない…、そう思いたいのですが、実は当時、会堂から追い出されることは、ユダヤ人コミュニティから追い出されることを意味し、もっと言うならば完全な罪人として周囲の皆から遠ざけられることを意味していました。

村八分という言葉もありますが、正常な社会生活が難しくなるのです。

ある意味絶望的な体験でもあったことをぜひ想像してみてください。

しかし、そんな風に彼が追い出されたことをイエスさまは聞いて、お会いになり、また声をかけてくださいました。

9:35 ･･･「あなたは人の子を信じるか」。

9:36 彼は答えて言った、「主よ、それはどなたですか。そのかたを信じたいのですが」。

それに対して

9:37 イエスは彼に言われた、「あなたは、もうその人に会っている。今あなたと話しているのが、その人である」。

直訳は、「もうその人を見ている」ということです。

その開かれた目は、その人を見ているんだよ、と伝えたのです。

この元盲人にとって、目が開かれて最も幸いな出来事がこの出会いでした。

イエスさまが、あなたを見いだしてくださっています。そしてわたしたちに向けて、この礼拝の中で、「あなたは、その人をもう見ています」。と言ってくださり、わたしたちを恵みの世界につないでくださるのです。

Ⅱ．キリストの裁きを知る。

9:39 そこでイエスは言われた、「わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」。

聖書が語る「見える」という事実。　それはただ肉体的な目が見えるということだけではありません。心の目が開かれるということです。

この元盲人は、その肉体的な目が開かれると同時に、その心の目も開かれていくことを経験しました。

アメイジング・グレイス。その賛美の作者が、ウィルバーフォースにとって大切な相談相手である牧師ジョン・ニュートンでした。　その昔奴隷商人の船の船長であった彼の、罪の泥沼の中からかの救いの経験から生まれたものです。彼は、ある嵐の中で絶体絶命の危機の中、神様に祈り、その祈りが答えられ、救われた経験を通して神を知りました。

聖職者になった彼が、晩年、目が見えなくなりました。しかし、その開かれた心の目をもって、神様に仕え続けた姿が、印象的です。

目が開かれたとき、彼は自分の罪深さを徹底して悔い改め、そしてそれを大きく覆い癒す神の驚くべき恵みの世界に目が開かれていたのです。

さて今日、イエス・キリストは「裁くためにこられた」と語られています。

わたしたちが聞きたいのは、「イエス・キリストは救うためにこられた」という言葉のみではないですか？　それも事実であると同時に、もう一つの真実「イエス・キリストは裁くためにこられた」ということを心に留める必要があるのです。

つまり「救い」と「裁き」が、別々のものではなく、むしろ一緒にあるということです。

それは、イエスさまを巡って起こる出来事なのです。

その心の目をもって、イエス様をどう見るか…ということです。

つまり神様が、私たちを救うのためにイエス様をお遣わしになったという事実を、素直に受けとめるかどうか、それが「裁き」です。ここに救いがかかっているのです。

ヨハネ3:17-18

3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

今日、皆さんが、信じて救われていることの事実を、心から感謝します。

Ⅲ．人にある罪の難しさを知る。

9:40 そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、それを聞いてイエスに言った、「それでは、わたしたちも盲人なのでしょうか」。

それはある意味、お前はわたしたちをどんな風に捉えているのか、まさか見えてないなどと言わないよな…というような詰問に近いものでありました。

それに対して…

9:41 イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、

元盲人は、事実目が見えませんでした。だから目を開けてもらう必要がありました。
彼にはそれが当然のことながらわかっていました。
同時に、その心の目もそうであったのです。救いを必要としていた。
イエスさまの出会いを通して、彼女は、その罪と呪いから癒され解放されたのです

しかし、今パリサイ派の人たちは、自分たちが正しい人間で、正しく見えていると思っている。だから自分の目が見えていないことに気づかず、神さまの御思いをも知ることがなかったのです。
つまり救いを必要としてはおらず、だからその必要を説くイエス様の言葉にも心が開かれなかった…ということです。
私たちは、自分が罪びとであり、目が開かれる必要がある…ということを心から知ってはじめてイエス・キリストの十字架の前に跪き、その驚くべき恵みを知ることができるのです。

さいごに）
いつの時代にも、正義を語りながらも神さまに背を向ける人はいます。
もしかしたら、それが、わたしたちの心の目の現実となっていないか。
わたしたちの心に、聖書に照らして気づかせていただくこと、目を開いていただくことが大切です。
そうして、改めて恵み深いイエスさまを求めていくとき、イエスさまはわたしの目に触れてくださいます。そうしてイエスさまを見いだすことできます。「あなたは、もう私を見ています」と言っていただけるのです。
そしてここには、イエスさまにつながって生きるがゆえの、絶大な安心があるのです。